



牧野のニンジン畑

農業に専念します。最初は、慣行栽培でお米とピーマンを生産し、農協に出荷していました。専業農家として数年経った時、あるキュウリ農家の方が、自分の家で食べる分を、出荷用とは別に作っているところを目にします。

「ちょうど次男と三男が生まれたばかりでした。自分が作った野菜は、大丈夫なのかと考えました。」  
それから有機農業に取り組もうと模索していた時、近くの同級生から学校生協との取引をすすめられ、そこに出荷するようになりま

す。その後、「グリーンコープくまもと」と取引がある生産者団体「愛農会」から、出荷の依頼を受けます。  
「平坦部は、冬は野菜があるけれども、春夏がありません。愛農会は、御船から清和までの産地で、リレー出荷の体制を作ろうとしており、中間地の生産物が求められていたのです。」

有機農業では、土づくりがより

重要となります。土壌分析を肥料メーカーに委託、施肥設計に基づいて有機肥料を投入します。「サトイモやピーマン、ナスなど、栽培期間が長いものは、失敗すると高くつきます。勘では収量が取れませんから。」  
「堆肥は、牛糞、鶏糞、豚糞を使ってみましたが、これらを毎年替えるのが一番良いようです。」  
また、同じ圃場で、同じ作物を作り続けると収量が減っていくことから、どの圃場も全て、毎年作物を替えています。  
「記録をしているので、わからなくなることはありません。また、作物は同じでも、圃場の一枚、一枚で違います。マニュアルよりも現場の把握の方が大切です。」

町と町の境で、標高としても中間地に住む中村さんは、「ここだからこそ、標高の違う圃場を使って、年間を通した作物の栽培ができる」と考えました。「全てが経験です。私の家は町境にあります。色んな所に行つて、積極的に人と付き合つて、情報を入れながら常に勉強をしてきました。自分から出て行つ



カブ



ツクネイモ

て、求めないと情報は入りません。」  
「売り先がないと、有機農業は難しいです。だけど、相手の顔が見えるのが有機農業です。」  
※お詫びと訂正 前号で「年間50品目を超える有機農産物のリレー出荷をする中村司郎さん」としていましたが、正しくは「年間20品目程度の有機農産物」の誤りでした。

次号「有機の人」は、佐藤昭人さん（市の原）を紹介し



なかむら しろう  
中村 司郎さん  
昭和32年生まれ 葛原

「基本は、この地域でいかに反収(たんしゅう)10aあたりの収量)をあげるかです。近くの三ヶ地区では、以前から有機農業をしていました。地形が悪く、経営面積が少ない条件の中で、普通の農業では、収入が上がリません。ここで、専業農家で立つていく術(すべ)は、有機農産物のリレー出荷しかなかったのです。」  
中村司郎さんの住まいは、町の最も西にあり、すぐ隣は御船町の水越(みずこし)地区です。標高は200m〜300mの中間地。その条件を活かして、家から車で30分以内のところに、平坦部から、中間地、山間地、それぞれに圃場を持ち、カブやニンジン、サトイモをはじめ、20品目程度の作物を、年間を通して生産しています。  
「二年間の収入を平均化するためです。ここでは、一作でバンとは稼げませんから。」  
「(それぞれの圃場で)作りやすい時に、作りやすい物を作ります、適地適作です。」

そうすれば、病気も出にくく、虫もつきにくいのです。」  
中村さんは、昭和55年、23歳の時に豊美(とよみ)さんと結婚。当時は、家から足場を組む会社に勤めながら農業をしていました。そして、25歳の時に、「勤めながらよりも、農業専門でいこう」と、



なかむらとよみ  
中村豊美さん、司郎さん

今から41年前の昭和52年に、旧矢部町で「第3回有機農業全国大会」が開催されるなど、早くから山都町では有機農業が盛んです。この有機農業に関わる「有機の人」を紹介しています。